



テタロクヤン

「こちらにどうぞ、おかけください」の意味
北嶋イサイカ(由紀)さん(46)
＝国立アイヌ民族博物館学芸員

—イカタイ(日高地方東部のあいさつで「おひさしぶり」)。今のお仕事を教えていただけますか。

来年4月24日の国立アイヌ民族博物館(胆振管内白老町)のオープンに向けて、アイヌ文化をしょうかいする準備をしています。ぬい物などの手仕事や物を作ることが好きなので、アイヌ文化のものづくりを知ってほしいと思っています。

—アイヌ文化はどこで学ばれましたか。

浦河町(日高管内)で育ち、小学校の頃からセーターを編んだりするのが好きでした。アイヌのししゅうを覚えたのは34歳のころ。その後、札幌大学にウレシバクラブというアイヌ文化を学ぶ場ができたんです。大学に通ってアイヌ語も学びながら、初めは独学で着物を作り、その後、平取町(同)の先生に教えていただいたりもしました。—大工のコンテストで全道2位になったとか。はい。高校卒業後は働いていましたが、もっとものづ

アイヌ文化のものづくり知って

〈このコーナーでは、さまざまな仕事をするアイヌの人にインタビューします。〉

いろいろないのりの時に木をけずって作る大切なものです。カムイにお供えしたり、イナウの力で魔物を追いはらうこともありま

ます、木の外側の皮をむき、少しかわしてからマキリ(小刀)で表面をうすくけずると、くるくるとカールしたりポンのようなものができます。それを何度もくり返してふさを作ります。イナウにはいろいろな形や大きさがあります。お供えするカムイが男性か女性か、また目的などによって、形や本数、組み合わせをかえます。

(泉洋輔 札幌大学ウレシバクラブ3年生)

くりを知りたくて北見高等技術専門学院で建築デザインを学びました。2級建築士の資格を取り、母校で先生になろうとも思いましたが、アイヌの事を知りたい思いも強かったんです。

子供のころ、アイヌということで周囲からいやな態度を取られることもありましたが、父方の祖父は和人で、私をかわいがってくれました。それもあってアイヌをきらいにはなりませんでした。知る機会もほとんどなく育ちました。

今の私にとって、自分の文化を知って好きになり、学んだことや体験を話すことは、差別の体験から回復することでもあるんです。

—読者のみなさんに伝えたいことは。

私の家はあまり裕福ではありませんでした。それでも親は、子供がやりたいことをやらせようと工夫してくれました。みなさんもやりたいことがあったら、自分にできるやり方で長く取り組んでみてください。

いろいろな木でストウイナウを作っていると、仲間になって飛んで行く



「そこで、天の神はあなたにイナウを取りもどすように求めてきました。あなたが心配で言わずにいましたが、今はあなたも大きくなったので、いよいよ大魔神と戦う時が来ました」。お姉さんは続けて「私が育てた方よ、戦いに行く前に、準備として、はだの白い神・柳のカムイ、はだの赤い神・ハノノキのカムイ、はだの青い神・ニワトコのカムイ、弁舌にたけた神・ハシドイのカムイ、はだの黒い神・エンジュのカムイたちをストウイナウにしないさい。それを、60本ずつ作っていのりをささないさい。そうすればその神々があなたとともに戦ってくれるでしょう」。そこで私は立ち上がり、金の小袖をまとい、金のベルトをしめました。そして、その燃えたハルニレの衣を羽織り、さやじりの燃えた刀を身に着けてかけ出しました。森の中を歩いてお姉さんが教えた木々で60本ずつストウイナウを作り、いのりをしました。すると突然、私の守り神が大風を起こし、私はその風に乗って空を飛びました。見ると、私が立てたストウイナウたちもいっしょに飛び立ち、私のまわりに近く遠く鳥の群れのよう

地獄へ行って大魔神と戦った末、ついにたおしてイナウを取りもどした



「私が育てた方よ、ときどき天から手紙が来るのを見て不思議に思ってたでしょう。あなたがまだあまりに幼いので知らせないでいたが、実は天の神々が男のイナウ・キケチノイイナウと女のイナウ・キケバラセイナウという夫婦のイナウを、あなたに向けて送ったのです。あなたがそれと同じものを作り、人間界に広めるようにと。ところが夫婦のイナウが天から降りて来たところを地の果てに住む大魔神がうばい去って、6重の箱にしまいこんでしまったのです」

お姉さんに大切に守られて育つアイヌラックル



見ると、山裾にとびらの付いたどうくつがあり、木のとびらで閉ざされていました。それをけやぶつて中に飛びこむと、大魔神がイナウを入れた箱にひさをのせて、座っていました。私はかけよって刀をぬぎ、ほのおのようにげしげしく切りつけました。大魔神の頭めがけて切り下ると、すんでのころで刀をかわし、飛び上がりました。そうして戦いがはじまりました。大魔神にもたくさん手下がいて、ストウイナウのカムイたちと激しく戦いました。

そのうち、戦いがあまりに激しく、世界がこれぞうになったので、地下の地獄で戦いました。清い神であるストウイナウは、地獄での戦いには弱く、あちこちでたましいが飛び去る音が聞こえました。命を落としたカムイのためにいのりながら、6年の間、戦い続け、ようやく大魔神をたおしました。取りもどしたイナウを持って地上に帰ると、お姉さんはともに戦ってくれた神々のためにいのりましようと言いました。そこで酒とイナウを作り、遠く近くの神々を呼び集めて、ストウイナウカムイたちのたましいが神の世界に帰ることができるよう、心をこめていのりました。それから、お姉さんとともにいつものくらしにもどりました。

カムイたちと大魔神を退治

その神は、樺太ではヤイレスーボ、北海道の東から北ではサマイエクル、そして南から西の日高地方や胆振地方ではアイヌラックルと呼ばれています。今回は、アイヌラックルがイナウを人間界に広める前に、それをぬすんでひとりじめしようとした大魔神を退治したお話です。アイヌラックルが作ったストウイナウカムイは特別なイナウで、守り神として人々を助けるものです。日高西部や胆振で作られるストウイナウカムイは、口と呼ばれる刻み目と心臓、内臓を持ち、イナウのふさで包まれています。それに刀ややりを持たせた、どこか人の姿を思わせるものです。においやとげのある木は、特に強い魔力の力がある神だと言われ、守り神にされます。



夫婦のイナウがさらわれた

日高管内日高町の話

(久保寺逸彦「アイヌ叙事詩 神話聖伝の研究」より)